

# 連続国際シンポジウム 2007

# 共生社会の実現と 先端科学への挑戦



（読売新聞）

シンポジウム毎に「東洋大学が発信するキーワード」をシリーズとして掲載。第1回目は「環境共生社会の構築」

今年度から開催しているこの連続国際シンポジウムは、共生社会の実現と先端科学に取り組む東洋大学の研究活動を、広く社会に発信する機会として企画されたものです。2007年度は、「環境共生社会」(7/6)、「エコ・フィロソフィ」(10/13)、「バイオ・ナノ融合研究」(12/4・5)をテーマに全3回、各分野をリードする専門家を世界から招いて開催しています。

本学におけるこれらの分野の研究は、研究機関としては国際的な評価を得ていますが、それとは対照的に、一般に対する情報発信の少なさから、研究者を除けば国内の認知はあまり進んでいませんでした。このことをふまえ、多くの人に本学の研究活動を知ってもらうため、読売新聞社の後援によりその成果を新聞紙上で展開しています。学生の皆さんにとっても、本学の研究が社会的に意義のある活動であることを知り、それが大きな自信につながることを期待しています。

## 第1回「環境共生社会の交通まちづくり」(2007年7月6日(金)開催：井上円了ホール 聴講者460名)

### 【シンポジウム報告】

環境問題の解決に向けた持続可能性の視点から、都市づくりを長期的・戦略的に推進するシナリオと仕組みづくりが大きな課題となっています。特に交通機関から排出される温室効果ガスを抑制する取り組みが、国際的な関心を集めています。

第1回のシンポジウムでは、交通問題に焦点を当て、環境と経済・社会発展の両立は可能かを模索。公共交通の改善と歩行空間整備により市街地の活性化を進めているエジンプラ(イギリス)の事例と、低コストの快速バスシステムを構築し、大胆で先駆的な環境・交通まちづくりを統合的に推進しているクリチバ(ブラジル)の成功体験を紹介いただきながら、日本が目指すべき交通の将来像について考える機会となりました。

詳細は<http://www.toyo.ac.jp/symposium>で紹介しています。



交通計画の面で世界の専門家の注目を集めるブラジル・クリチバ。「都市の中心は車ではなく人」を徹底し、車道より歩道が広い。バス交通システムを充実させ、人々は自家用車でなく公共輸送を利用。CO<sub>2</sub>削減に貢献する。

主催 / 東洋大学国際共生社会研究センター・大学院国際地域学研究所  
共催 / 財団法人豊田都市交通研究所、東洋大学学術研究推進センター  
後援 / 読売新聞東京本社、土木学会、都市計画学会、交通エコロジー・モビリティ財団、国際協力機構(JICA)、国際連合人間移住計画(ハビタット)、アジア太平洋事務所

### 【基調講演】



太田勝敏

国際地域学部教授・国際共生社会研究センターチームリーダー



ジョージ・ヘイズル氏

ロバート・ゴードン 大学名誉教授



中村ひとし氏

環境コンサルタント、元クリチバ市環境局長

### 【パネルディスカッション】



【パネリスト】 ジョージ・ヘイズル氏、中村ひとし氏、マリ・クリスティヌ氏(異文化コミュニケーション、国際ハビタット親善大使)、望月真一氏(アトリエUDI、カーフリーデー・ジャパン代表)、中村文彦氏(横浜国立大学教授)

【コーディネーター】 太田勝敏教授

## 第2回「今、地球を維持する哲学とは? エコ・フィロソフィを求めて」 [予告] 次号で報告します

科学・技術の発展は、私たちに多くの豊かさをもたらしてくれましたが、同時に私たちの住む地球から緑や生物、資源等を奪い、環境の汚染・破壊をきたしてしまいました。

今や地球はあと50年、100年持つかという深刻な危機を迎えており、社会のあり方や個人の生き方が深く問われています。この時にあたり、科学の自然観・世界観を問い直し、キリスト教・仏教といった東西の伝統的な自然観を学びなおすことにより、人間と自然・環境とのあるべき関係を深く考察。現代の地球市民としてのライフスタイルを支える新たなエコ・フィロソフィ(環境哲学)を探求します。

日時 / 10月13日(土)午後1時~5時(開場12時)  
会場 / 東洋大学白山キャンパス井上円了ホール  
主催 / 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ  
(Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University[ TIEPh ])  
共催 / サステイナビリティ学連携研究機構  
(Integrated Research System for Sustainability Science[ IR3S ])  
東洋大学学術研究推進センター  
後援 / 読売新聞東京本社